授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2118 号

Postoperative pulmonary complications and thoracocentesis associated with early versus late chest tube removal after thoracic esophagectomy with three-field dissection: a propensity score matching analysis

(3 領域郭清を伴う胸部食道切除術後における胸腔ドレーン早期抜去と従来抜去が術後肺合併症や胸水穿刺に与える影響；プロペンシティスコアマッチング解析)

佐藤　琢爾（さとう　たくじ）

博士（医学）

論文審査結果の要旨
本論文は、胸部食道癌根治切除術後の未だ明らかになっていない胸腔ドレーン管理に一躍を投じる論文である。胸部手術後の胸腔ドレーン管理は、従来から 1 日排液量を基準とした管理が実臨床で使用されてきた。しかし、従来の管理ではドレーン留置期間が長くなることが知られており、ERAS 概念から逸れたものとなる。ERAS 概念に順守し、近年、肺切除術後の胸腔ドレーン管理は、新たな基準による管理が報告されているが、食道切除術後のドレーン管理を提案する報告は少ない。本論文は、当科において、食道切除術後の胸腔ドレーン管理における新基準を作成し、ドレーン早期抜去の有効性と妥当性を明らかにすることを目的とし、2013 年 12 月から 2015 年 12 月の期間を対象として、プロペンシティスコアマッチング解析、単変量、多変量解析を行った。1 日排液量を基準とした管理を行った従来抜去群 89 例と新たな基準で管理を行った早期抜去群 89 例を比較し、呼吸器合併症割合や胸水穿刺割合に差はないものの、早期抜去群において離床開始時期を早めることができたことを報告した。また、早期抜去法は呼吸器合併症、胸水穿刺割合において独立した危険因子ではないことを多変量解析で確認し、従来のドレーン管理と同様に安全性と妥当性が確認され、胸部食道切除術後の胸腔ドレーン管理に新たな可能性を始めて示唆する臨床的に意義ある論文である。 よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。